

周産期班 58年度研究報告書

SIDSに関する研究 —周産期班—

共同研究者 水口 弘司、大塚 尚之

今回、本邦では初めてのSudden infant death Syndrome(以下SIDSと略す。)についての大きかりな調査、研究が行なわれた。その周産期班の一員として私達も参加した訳であるが、私達産婦人科医は、SIDS罹患者を治療することはもちろん、観察することも、殆んど皆無であった。よって3年計画の1年目に当る昭和56年度は、まずSIDSの概念、現在までの知見等を文献的に考察するところから始めた。これは同班の共同研究者である北里大学小児科の仁志田先生の検索された文献を中心に、また独自に検索した文献にて行った。

その中には、幾つかの興味ある文献がみられたが、

1. 欧米では、SIDSは乳幼児死因の上位を占める重要な疾患単位として広く受け入れられているが、本邦では、その認識等にかかなりの立ち遅れがみられる。
2. 欧米では、古くより種々の調査、研究が行なわれているが、その原因はいまだ確定されていない。よってその治療法も確率していない。
3. しかしながら、無呼吸発作等のエピソードを持つものや、同胞にSIDS児を持つものに対する家庭でのモニタリングにより救命し得た報告もみられる。
4. 病因としては、Tonkinの仮説は高い評価を受けているが、その発生条件として、感染、貧血、未熟性等をあげており、また舌の発達形態より人工栄養児の易発症を説いている。
5. LewakやNaeyeが、SIDSのrisk factorを示し、またCarpenterは、Scoring systemとしてまとめ、SIDSの発症予測を何とか可能にしようと努力している論文が散見されるが、そのrisk factorには、多分にその母体因子や児の周産期因子が含まれている。
6. 最近では、病理学的調査により種々の慢性低酸素症の所見が発見され注目されているが、慢性の低酸素症は出生以前(すなわち母体内)より連続しておこるものも、かなりあると推測される。

私達の注目すべきは、上記の3. 4. 5. 6などの点で、個体の発生期、胎児期、周産期についての観察をおこたりに行い、SIDSとの関連を詳しく検討することにより、SIDSの原因探究の一助とし、また発症予測、予防のための一つの方法論となりはしないかと考えた。

私達周産期班一同は、種々の文献的考察より、別表のような周産期のrisk factorをrist upし、そのdata集収のため、別表の様式の調査用紙を考案した。そして昭和57年度～昭和58年度の研究目標として、次の項目を掲げた。

① prospective study

昭和57年1月1日より、昭和57年12月31日までに当施設で出生した児全員を対象に、1年間 follow up して行く。まず分娩時に、別表2の調査用紙にできるだけ詳細に該当項目を記入し、その後は1ヶ月検診を当院小児科にて行い、また3～4ヶ月等、6～7ヶ月時、12～13ヶ月時の状況把握には、SIDSの有無、SIDS不全型のエピソード等も含めて、葉書によるアンケート調査を用いた。

② retro spective study

過去5年間に当施設で出生した、SIDS high risk infant と考えられる約500例について葉書によるアンケート調査を行った。high risk infant の選択基準として、

- i) 妊娠36週以前の早産児
- ii) 出生体重2500g 以下の低体重出生児
- iii) 多胎児
- iv) Small for date児
- v) 母体合併症 (DM、妊娠中毒症) のある児
- vi) 帝切により出生した児
- vii) 20歳以下の若年産婦の児
- viii) 35才以上の高年産婦の児
- ix) 同胞3人以上の児
- x) fetal distressのあった児

以上10項目に、1つあるいはそれ以上に該当する児について約500人を抽出し、調査対象とした。

③ Case Work

上記①及び②の調査中、SIDS児あるいは、SIDS不全例に遭遇した場合は、前述の調査用紙、またそれ以外の項目についても出来るだけ詳細なdataをとり、Scoring System等にあてはめ、その有用性をみる。また意識的にSIDS例を集め、周産期の調査を行い、controlと比較し、risk factorの重要性、有用性について検討する。

昭和57年度及び昭和58年度は、上記の調査及び集計、検討にあてた訳であるが、結果は以下の様であった。

① prospective study

昭和57年度の当科における全分娩数は601例であり、うち6例が双胎で全分娩児数は607例、ただし胎内死亡及び分娩時死亡が14例あり、全調査対象数は593例。

- 1ヶ月検診にて小児科受診数 536例 (90.3%)
- 3～4ヶ月アンケート解答数 441例 (74.4%)
- 6～7ヶ月アンケート解答数 378例 (63.7%)
- 12～13ヶ月アンケート解答数 342例 (57.7%)

解答率については、土地柄、転勤、転居等が非常に多く、また外国人も含まれているため、12～13ヶ月時のアンケート葉書は、100例弱が返送されて来るなど、仕方のない数字かも知れない。もちろん時間のゆるす限り、再度アンケートに協力してくれるよう要請もしたが、そのtotalが上記の数字である。この調査の最終評価として生後1年の間に、SIDSまたはSIDS不全型の有無を判定しようとするもので、よって生後より1年間の数回の葉書アンケートに対し、12～13ヶ月時の解答あるものを有効調査対象者とした(342例)。

そのうち1例は日令1日で、当科新生児室にて突然のapnea, cyanosisを来たし、SIDS不全型を疑い、小児科にて精査を行なったが、brain infanctionとの診断であった。また死亡例が2例あり、その死亡原因は大血管転移症と、サイトメガロウィルス肺炎とのことであった。幸か不幸か、この1年間に当科にて出生した児は、SIDSまたはSIDS不全型の症例はなく、生後1年の時点で340/342が健康に育っているとの解答であった。

②retro spective study

先に述べたように high risk factorを持つと思われる492人の対象者にアンケート葉書を送付したところ、全解答数は127人(25.8%)であった。この数字もまた、転居等によるもの、アンケートの主旨の理解できないもの、協力的でないものなどの理由によると考えられるが、時間的にも制限があり、細部の説明の不ゆきとどきもあり、仕方のないものと思われた。この解答の中にもSIDS及び不全型の症例は見られなかった。

私達の施設では、この調査期間中にSIDS及びSIDS不全型を1例もみず、今回の調査はcontrolとしての役目しか果たし得なかった。SIDS数十例の周産期調査には周産期班分担研究者である日本医科大学産婦人科の室岡先生があたられたが、その良きcontrolとなれば幸いと考えている。

今回行ったprospective studyはアトランダムなある集団を1年にわたりfollow upしていくといった方法を選んだ訳であるが、その中にSIDS例を見い出さなければ、その評価が非常に難しい。今後もし機会があれば、その方法論としてNICHDのdesignした様はcase control studyも有用と思われる。

また今後の問題として無解答だった例に注目したい。今回の調査でみられたことは、解答のあった例は比較的順調に発育、発達している。無解答の理由は個々に違ったものがあると思われるが、中には児を失ったための、無解答もあると思われ、時間的余裕があれば是非とも追跡調査が必要と思われる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



今回、本邦では初めての Sudden infant death Syndrome(以下 SIDS と略す。)についての大きかりな調査、研究が行なわれた。その周産期班の一員として私達も参加した訳であるが、私達産婦人科医は、SIDS 罹患者を治療することはもちろん、'観察することも、殆んど皆無であった。よって3年計画の1年目に当る昭和56年度は、まずSIDSの概念、現在までの知見等を文献的に考察するところから始めた。これは同班の共同研究者である北里大学小児科の仁志田先生の検索された文献を中心に、また独自に検索した文献にて行った。

その中には、幾つかの興味ある文献がみられたが、

1. 欧米では、SIDSは乳幼児死因の上位を占める重要な疾患単位として広く受け入れられているが、本邦では、その認識等にかなりの立ち遅れがみられる。
2. 欧米では、古くより種々の調査、研究が行なわれているが、その原因はいまだ確定されていない。よってその治療法も確率していない。
3. しかしながら、無呼吸発作等のエピソードを持つものや、同胞にSIDS児を持つものに対する家庭でのモニタリングにより救命し得た報告もみられる。
4. 病因としては、Tonkinの仮説は高い評価を受けているが、その発生条件として、感染、貧血、未熟性等をあげており、また舌の発達形態より人工栄養児の易発症を説いている。
5. LewakやNaeyeが、SIDSのrisk factorを示し、またCarpenterは、Scoring systemとしてまとめ、SIDSの発症予測を何とか可能にしようと努力している論文が散見されるが、そのrisk factorには、多分にその母体因子や児の周産期因子が含まれている。
6. 最近では、病理学的調査により種々の慢性低酸素症の所見が発見され注目されているが、慢性の低酸素症は出生以前(すなわち母体内)より連続しておこるものも、かなりあると推測される。